

# 藤代禎輔（素人）の生涯

——瀧廉太郎、玉井喜作との接点を中心に——

The Career of Teisuke (Sojin) FUJISHIRO

A Paper Focussing on A Point of Contact with Rentaro TAKI, Kisaku TAMAI

泉 健

Ken IZUMI

2009年10月1日受理

## はじめに

この10年余り、“Ost=Asien”というドイツ語の月刊雑誌を基にして、19世紀末から20世紀初頭のベルリンにおける音楽生活の様相を研究している(泉健 2001、2002、2003、2004a、2004b、2005、2006、2007、2008、2009)。昨年は北里 蘭の「日本の演劇」(Takeshi KITASATO 1901)を翻訳し、20世紀初頭のベルリンで、日本の演劇の歴史の概要が紹介されていたことを論じた。これは世紀転換期のベルリンにおいて、日本の伝統音楽がどのように受容されていたかということを知るための重要な資料の一つと言える。また北里 蘭は、日本における民族音楽学の歴史においても興味深い仕事を残しており、斯学の歴史の中での彼の位置づけに関しても考察した。

そこで次に、これから数回にわたって、同じ年の“Ost=Asien”に掲載された藤代禎輔（素人）の「オペレッタ 芸者」(Teisuke FUJISHIRO 1901)を取りあげ、これを様々な角度から考察していきたい。藤代禎輔は独文学者で、長く京都帝国大学教授を務めた。彼は夏目漱石や国文学者の芳賀矢一らと同じ船で洋行し、1900年（明治33）から1902年（明治35）まで、ベルリン大学とライプツィヒ大学に学んだ。生涯にわたって漱石の友人であった。また藤代のライプツィヒ大学時代は、ちょうど瀧廉太郎のドイツ留学時代とも重なり、瀧が病のために帰国せざるを得なくなった時の送別会には、藤代も出席している。

「オペレッタ 芸者」は、藤代がベルリン大学時代に書いたもので、“Ost=Asien”通巻41号（4巻5号1901年8月号）にドイツ語で掲載された。彼は帰国後、学術論文やエッセイなどを纏めて順次4冊の書物を著したが、「オペレッタ 芸者」はそのいずれにも収録されていない。そこで今回ここに紹介するような次第である。

“Ost=Asien”を編集発行していたのは、玉井喜作という日本人である。藤代禎輔の生涯を辿っていくと、玉井喜作との接点が3箇所見いだされて興味深い。すなわち、修学時代の本郷台町の独逸学校時代、東京大

学予備門（医学部予科）時代、そしてベルリン大学時代の3つの時期である。従って“Ost=Asien”という雑誌そのものの研究においても、藤代禎輔は重要な人物の一人と言える。

今回のこの論攷では、まず彼の生涯をまとめてみた。今回は、彼の4冊の著作を中心として、その中に現れている彼の音楽論をまとめる予定である。これは、当時の日本における西洋音楽の受容を研究していく上での貴重な資料となるであろう。そして第3回目に、彼の書いた「オペレッタ 芸者」の内容、及びジャポニスムとオペレッタの歴史の中でのこの論文の位置づけなどを考察していきたい。

## I. 修学時代から第一高等学校教授就任まで

藤代禎輔は1868年（明治1）に生まれ、1927年（昭和2）に亡くなった。彼は帝国大学（現東京大学）を卒業後、同大学院を経てドイツに留学した。帰国後しばらくして、京都帝国大学文科大学に新設された西洋文学講座の教授となっている。学者として、ドイツ文学・戯曲の研究に一生を捧げた、58年と8ヶ月余りの人生であった。次の頁に彼の生涯を年表にしてまとめた。1979年以降の部分は、近年のジャポニスム研究史上、主にオペレッタ『芸者』『ミカド』に関係する事柄を中心にまとめたものである。その部分に関する書誌データは、44頁以下の引用文献・参考文献を参照されたい。

藤代禎輔に関しては、すでに近代文学研究室による紹介があり（近代文学研究室 1967a）、またドイツ留学時代に関しては、上村直己教授の現地調査による精緻な研究（上村直己 2001：221-258）もある。以下主にこれらに基づきながら、玉井喜作との3箇所の接点や、瀧廉太郎との関連にも注目して、彼の生涯を振り返っていききたい。

### 1. 本郷台町の独逸学校

藤代禎輔は1868年7月24日に千葉県検見川町474番地で生まれた。地元の小学校を卒業後、1881年（明治14）に医学を学ぶ目的で東京に行き、やがて本郷台町

藤代 禎 輔 (素 人) 年 譜				
西暦	和暦	歳	出来事 (1901-1903には瀧廉太郎関係も含む)	世界史・日本史・音楽
1868	明治 1		7月24日千葉県検見川にて藤代禎輔生誕	明治維新1868
1871	明治 4	3		ドイツ帝国成立1871
1881	明治14	13	医学修行のため東京に出て本郷台町の独逸学校に入学、約1年後に東京大学	
1884	明治17	16	医学部予科3級に編入	森鷗外ドイツ留学
1885	明治18	17	12月東京大学予備門分覺を卒業	1884-88
1888	明治21	20	7月第一高等中学校文科を卒業	
1891	明治24	23	7月帝国大学文科大学独逸文学科を卒業	
			大学院に進学し第一高等学校・高等師範学校でも教える	
1894	明治27	26		日清戦争1894-95
1896	明治29	28	9月第一高等学校教授就任：ドイツ語を担当	
1898	明治31	30	12月東京帝国大学文科大学講師を嘱託	
1900	明治33	32	ドイツ留学：9月横浜出発、11月ベルリン大学入学	パリ万国博覧会1900
1901	明治34	33	瀧廉太郎4月6日横浜出発、5月18日ベルリン着 4月8日ベルリンで花祭りを行う 瀧廉太郎6月7日ベルリンを出発してライプツィヒ到着 7月5日中央劇場でオペレッタ『芸者』を観る “Ost=Asien” Nr.41, 8月号：藤代禎輔博士「オペレッタ 芸者」 8月-9月ヴァイマル・イエナを経てスイスへ旅行 10月ライプツィヒ大学へ転学 瀧廉太郎10月~11月王立ライプツィヒ音楽院に通学 瀧廉太郎12月2日風邪が原因で聖ヤコブ病院に入院	義和団事件1899-1901 ラフマニノフ, S.: ピアノ 協奏曲第2番1900-01 ラヴェル, M.: 水の戯れ マーラー, G.: 交響曲 第5番1901-02
1902	明治35	34	7月6日瀧廉太郎の送別会に出席 8月1日ライプツィヒ大学退学、その後ミュンヘンで過ごし12月26日に帰国 瀧廉太郎8月24日アントワープ出発、10月17日横浜着	日英同盟締結1902 島崎赤太郎ドイツ留学 1902-06
1903	明治36	35	東京帝国大学文科大学講師就任：ロマン派文学を講義 瀧廉太郎6月29日死去	ドビュッシー, C.: 版画
1904	明治37	36		日露戦争1904-05
1906	明治39	38	『草露集』9月大倉書店	
1907	明治40	39	京都帝国大学文科大学教授就任：西洋文学講座（ドイツ文学）を担当	
1908	明治41	40	文学博士学位取得	山田耕筰ドイツ留学 1910-13
1910	明治43	42		第一次世界大戦 1914-18
1914	大正 3	46	『文藝と人生』4月不老閣書房	ジャズがヨーロッパで流行 1921頃から
1916	大正 5	48	京都帝国大学文科大学学長（1919まで）	ベルク, A.: ヴォツェック 初演1925
1920	大正 9	52	学術視察のために各国へ出張	
1922	大正11	54	『文化境と自然境』10月文献書院	
1926	大正15	58	岩波書店より独逸文学叢書の刊行開始、昭和3年までに14冊刊行	
1927	昭和 2		4月18日死去『鵝筆餘滴』6月弘文堂書店	
1979	昭和54		ジャポネズリー学会発足	
1982	昭和57		鶴園紫磯子「近代フランス音楽にあらわれたオリエントと日本」	
1984	昭和59		鶴園紫磯子「歌劇『お菊さん』をめぐる」	
1986	昭和61		庄野潤三『サヴォイ・オペラ』、猪瀬直樹『ミカドの肖像』	
1989	平成 1			ベルリンの壁崩壊1989
1990	平成 2		井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』	東西ドイツの統一1990
1991	平成 3			ソ連体制の崩壊1991
1998	平成10		ジャポネズリー学会が名称をジャポニスム学会と改称	
2000	平成12		馬淵明子他編『ジャポニスム入門』、大須オペラ『芸者』公演	
2001	平成13		新井潤美『階級にとりつかれた人々』	
2002	平成14		ギルバート, W.S. 『喜歌劇ミカド』	
2003	平成15		橋本順光「茶屋の天使」	
2007	平成19		11月16-18日 東京室内歌劇場39期117回定期公演『ザ・芸者』	
2008	平成20		鶴園紫磯子「ジャポニスム・オペラ『ザ・芸者』公演批評」	

近代文学研究室「藤代素人」(1967)、上村直己「ドイツ留学時代の藤代禎輔」(2001)、泉健「“Ost=Asien” 研究—その1. 全目次—」(2002)、松本正著・大分県立先哲史料館編『瀧廉太郎』に基づいて作成。

にあった独逸学校に入学した。この独逸学校が玉井喜作との第一の接点である。玉井は1866年に山口県で生まれた後、広島の中経を経て1881年2月から11月まで同じ独逸学校で学んでいる。

以前玉井喜作の経歴を調べた時に、この独逸学校のことを不詳であった（泉健 2005：29、泉健 2006：25-26）。従来の玉井の伝記では、この独逸学校が獨協大学の前身とされていた（湯郷将和 1989：29、大島幹雄 1998：11）。しかしその後、上村直己教授の論文によって（上村直己 1988）、この学校は獨協大学の前身ではなく、東京大学予備門と東京大学医学部予科（いずれも旧制第一高等学校の前身）への予備校的性格を持つ私立の学校であることがわかった。一方獨協大学の前身は獨逸学協会学校であり、この設立は1883年（明治16）の10月である。玉井が独逸学校に学んだのはその2年前であり、独逸学校と獨逸学協会学校は全く別の学校であった。

## 2. 東京帝国大学への進学コース

ここで当時の東京大学への進学コースを振り返ってみると、次のようになっていた。1877年（明治10）4月に、東京開成学校と東京医学校の両校を併せて東京大学が成立した。当時はまだ初等・中等の普通教育が未発達であったために、この時同時に、官立東京英語学校と東京開成学校普通科を合併して東京大学予備門とした。東京大学予備門は、東京大学の法学部・理学部・文学部進学者のための独占的予備教育機関であり、修行年限は4年であった（泉健 2006：26）。

一方医学部は、別に修行年限5年の予科を設けて予備教育を行っていた。この医学部の予科は、1882年（明治15）の6月に予備門に吸収されている。その際、従来の予備門の学科を本學学科とし、医学部予科の学科を分學学科と称した。（第一高等學校編 1939；4、東京大学百年史編集委員会 1984；567-569）。

次に1886年（明治19）3月の帝国大学令により、東京大学は帝国大学という名称になった。同時に同年4月の新中学校令により、東京大学予備門は東京大学から分離独立し、第一高等中学校となる（第一高等學校編 1939；93）。さらに1894年（明治27）の高等学校令により、この第一高等中学校は、いわゆる旧制の第一高等学校となった（第一高等學校編 1939；229）。

そして1897年（明治30）には、新たに京都帝国大学が設立されたために、それまで日本で唯一の帝国大学であった東京のそれは、東京帝国大学と改称されることになった。

なお獨逸学協会学校は、帝国大学が創立された翌年の1887年（明治20）に普通科を設置し、しばらくの間はその卒業生を第一高等中学校に編入学させる特権を有していた（寺崎昌男 2007：190）。

## 3. 本郷台町の独逸学校の出身者

そこで、この本郷台町の独逸学校であるが、これは東京大学医学部ドイツ語教員の山村一蔵が設立したものであり、1878年（明治11）に開業願が出され、1887年（明治20）に廃業届が出されている（上村直己 1988：155）。教員の多くは東京大学医学部や大学予備門分學の教員であり、校舎が本郷にあったこともあり、「東大医学部への入学志願者がその準備のために通う学校として、独逸学校は好位置を占めていた」（上村直己 1988：154）。

この独逸学校の出身者には、藤代禎輔、玉井喜作の他に、例えば呉秀三、金杉栄五郎、山田鉄蔵などの医学博士や、井上密、美濃部俊吉などがいる（詳細は上村直己 1988：164-165）。『獨協百年』第4号には、旧獨逸學校出身者會の名簿も存在している（獨協学園百年史編纂室編 1980：226-228）。

独逸学校の場所は、当時の地名で本郷台町36-40番地にあった。現在、東大正門前の本郷郵便局から白山通りの方向に下っていくと、長泉寺という寺がある。この寺の北東から北西に隣接する一帯が、昔独逸学校のあった場所である。次の写真1はその現在の様子（北東側）である。



写真1 本郷台町の独逸学校があった場所

なお、玉井喜作は1886年（明治19）に私立東京速成学館という私塾を開業しているが、それはかつて自分も通ったこの独逸学校を真似たものであろう。東京速成学館は、当時の地名で麴町区3丁目69番地にあった。現在で言えば、皇居の半蔵門からJR四谷駅に向かう大通りの中間あたりである。

## 4. 東京大学予備門、第一高等中学校、帝国大学

### 1) 東京大学予備門から帝国大学へ

さて、藤代禎輔は独逸学校に1年ばかり通った後に、東京大学医学部予科3級に編入された。その後彼は1885年（明治18）12月に東京大学予備門分學（医学部予科の後身）を卒業し、1888年（明治21）7月に第一



高等学校文科を卒業している。当初医学を志しての上京であったが、途中から次第に文学に興味に移り、1888年9月に帝国大学文科大学の独逸文学科の第一期生として入学した。卒業は1891年(明治24)7月であった(藤代禎輔 1910: 421-422、近代文学研究室 1967a: 269-270、上村直己 2001: 222)。

予備門時代は藤代禎輔と玉井喜作の第2の接点であったが、その間の両者の接触を示す資料は残っていない。玉井の当時の経歴の確かな記録としては、彼が1888年(明治21)6月に札幌農学校に就職する際に、同校に提出した本人自筆の履歴書がある。それによれば、玉井は1881年(明治14年)2月から11月まで上記の独逸学校で学んだ後、同年11月に東京大学医学部予科に入学している。既述のように、この医学部予科は翌1882年(明治15)の6月に予備門に吸収された。さらにその履歴書によれば、1886年(明治19)11月に彼は同予科1級(予備門分業学科)から第一高等学校校ドイツ法律科に編入している(玉井喜作 1888)。これによると、彼は医学部予科の学科である分業学科を5年かけて1級まで進んでいることがわかる。その後玉井は、1888年6月から札幌農学校にドイツ語の非常勤講師として赴任したので(泉健 2006: 27-30)、藤代禎輔との接点は一旦途絶える。

## 2) 第一高等学校教授就任からドイツ留学へ

一方、藤代禎輔は帝国大学の独逸文学科を卒業後、大学院に進学して研究を続けながら、高等師範学校や第一高等学校で教鞭を執ることになった。そして1896年(明治29)9月には、第一高等学校教授に任ぜられている。大学院時代には、恩師フローレンツ、K.に依頼されて『万葉集』の翻訳も手伝っている。第5巻の山上憶良の有名な歌は次のように訳されている(近代文学研究室 1967: 299-301、藤代禎輔 1927: 138-146「F先生との万葉の生嚼」)。

銀も金も玉も何せむに まされる宝子に如かめやも  
Wozu Silber, Gold, und Edelsteine?  
Keinen besseren Schatz (gibt es) als das Kind,  
welchem nichts gleichkommt.

旧制高等学校教授が国費留学生に選出されるようになったのは、1900年(明治33)からであった。藤代禎輔はその第一回目に選ばれ、同年6月12日に満2ヶ年のドイツ留学を命ぜられた。1900年の国費留学生は、旧制高等学校教授の3人を含めて合計39人であった。ドイツ語の藤代禎輔(第一高等学校)、山口小太郎の他には、英語の夏目金之助(漱石・第五高等学校)、解剖学の柏村貞一(第二高等学校)、国文学の芳賀矢一、音楽の瀧廉太郎、美術の黒田清輝、農業経済学の高岡熊雄、耳鼻咽喉科学の木原岩太郎などがいた(渡辺實 1978: 798-799、上村直己 2001: 223)。藤代、芳賀、

柏村、高岡などは、ベルリンの玉井喜作家の『寄せ書き』にその名前が登場する(高岡熊雄に関しては、泉健 2006: 36-37を参照されたい)。木原岩太郎は病気のためにベルリンで亡くなっている。享年33歳であった(泉健 2004a: 61)。

## Ⅱ. ドイツ留学

### 1. ベルリン大学時代

#### 1) ベルリン大学在籍期間

さて、藤代禎輔は1900年(明治33)9月8日に横浜を出港した。ドイツの汽船プロイセン号に同乗した日本人留学生は、夏目漱石、芳賀矢一、稲垣乙丙(農学)、戸塚機知(軍医学)の4人であった。ベルリンまでの旅程については、藤代の「夏目君の片鱗」(藤代禎輔 1922: 252-259)に詳しい。これは後の1917年(大正6)に書かれたものである。これによれば、彼らはパリに着いた時に、ちょうど開催されていた万国博覧会を見ている。ここでは川上貞奴一座が公演していた。その後ロンドンに行く夏目漱石と別れて、一行4人は10月29日にベルリンに到着した。

藤代のベルリン大学在籍期間は、1900年11月2日から1901年10月3日までの2学期間である(上村直己 2001: 228)。

#### 2) 芳賀矢一の『留学日誌』より

藤代のベルリン時代の生活は、彼の親友である芳賀矢一の日記に詳しい。芳賀は藤代とともにベルリンに行き、1900年(明治33)11月5日からベルリン大学で学んでいる。そして約1年半の留学を終え、1902年(明治35)5月27日にベルリンを出発した。その後、パリ、ロンドン経由で同年8月24日に横浜港に着いている。この間の様子は彼の「留学日誌(明治33~35年)」(芳賀矢一 1937)に詳細に記録されており、これは藤代の生活を知る上でも貴重な資料となっている。特に藤代がベルリン大学に在籍していた時には、両者は連日のように会っていることがわかる。

#### ・ベルリンの花祭り

例えば1901年(明治34)4月8日には、「本日は伯日本人釋尊降誕會を行う」(芳賀矢一 1937: 669)とあり、ベルリンの和独会が中心となって、日本の行事花祭りを紹介したことが記されている。この時の写真は『Ost=Asien』No.38(1901年5月号)p.65に掲載されている。玉井喜作はこの写真を絵葉書にもしており、次の写真2がその絵葉書である。“Ost=Asien”の同号には、姉崎正治が「花祭りの意義」について、また巖谷小波が「花祭りについての物語」を寄稿している。

この写真の2列目右から三人目に、当時33歳の藤代禎輔が写っている。この他の数名に関しては以前簡単に説明をしたが(泉健 2004a: 54-55)、その後この13人の正確な人名などが判明したので(遠山嘉雄 1986: 66-68による)、ここに紹介しておきたい。最前



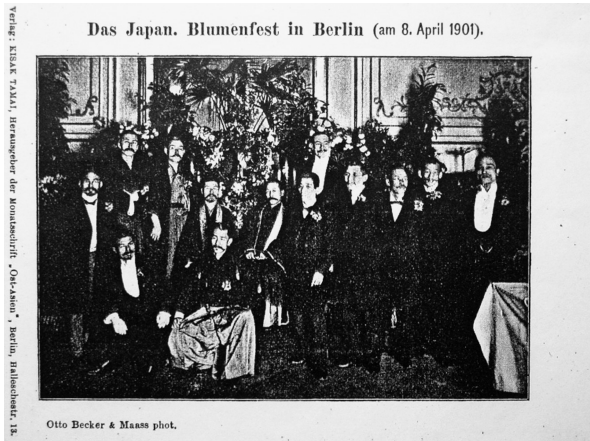


写真2 絵葉書：ベルリンでの花祭り

列の左から、池山栄吉、巖谷小波（児童文学者）、中列左から吉田静致（倫理学・東京帝国大学文学部教授）、近角常観（宗教・求道学舎設立）、藺田宗恵（宗教・仏教大学教授）、松本文三郎（インド哲学・京都帝国大学文科大学教授）、宮本叔（内科学・東京帝国大学医科大学教授）、藤代禎輔、美濃部達吉（比較法制史・東京帝国大学法学部教授）、森孝三、後列左から姉崎正治（宗教学・東京帝国大学教授）、玉井喜作、倉知鉄吉（公使館書記官）。各人の専門と、帰国してから後の職業に関しては、『幕末・明治期海外渡航者人物情報事典』（手塚晃・石塚利男共編 2003）を参照した。森、池山の2人に関する詳細は不明である。

なお藤代禎輔の雅号「素人」<sup>そじん</sup>は、この頃生まれている。巖谷小波は当時ベルリン東洋語学校の日本語講師を務めていたのだが、彼のベルリン到着は1900年（明治33）11月であった。彼は翌年1月に、ベルリン在住の俳句同好の邦人とともに白人会を發起し、自ら宗匠<sup>しやうと</sup>を務めている。この会には芳賀矢一や美濃部達吉や盧百寿（公使館書記官）などとともに藤代も加わり、その時に「素人」という名前で投稿したのがその雅号の始まりであった（上村直己 2001：231）。

#### ・オペレッタ『芸者』を観る

また1901年（明治34）7月5日には、「晩森、長尾、藤代三氏、ケットナー夫妻とチェントラル、テアテルに藝者の芝居を見る」（芳賀矢一 1937：683）と記されている。実は、これが本稿のシリーズの中心テーマであるところのオペレッタ『芸者』を観に行った時の記録である。これに関しては次回以降の論文で詳しく取り扱っていくことにしたい。

#### ・川上音二郎・川上貞奴と会う

ところで、藤代禎輔は1901年10月からライブツィヒ大学に転学するのだが、その後の芳賀矢一日記を読み進めていくと、本稿の今後の展開に関係する部分が多くあったので紹介しておきたい。まず1901年11月17日には、芳賀が玉井喜作の家に行き、ちょうどベルリンに公演に来ていた川上貞奴・音二郎夫妻に会った

ことが記されている。「森とともに玉井氏の寓に赴く廿人ばかりの會合にてビール會あり 川上音二郎夫妻 其他二三の女優いたる 管弦の合奏あり 夜十一時半 辭しかへる 歸途シュールタイズに晚餐」（芳賀矢一 1937：701）。これに対応するものとして、ベルリンの玉井家の『寄せ書き』の同日の頁に「芳賀」と署名が残されている（泉巖 1986：1901年11月17日）。この川上貞奴一座のベルリン公演に関しては、稿を改めて論じていく予定にしているので、この一件もその時に詳しく取りあげていきたい。

芳賀矢一が帰国のためにベルリンを発ったのは、1902年（明治35）5月27日であった。その一月ばかり前の4月16日には、芳賀の送別会が開かれており、玉井喜作も出席したことが記されている（芳賀矢一 1937：722）。

それから、この芳賀の日記を読んでいて意外な発見があった。それは芳賀矢一が帰国する時の船に、ちょうど川上貞奴一座も乗っていたということである。同年7月16日、17日、28日、8月5日に川上一座のことが記されている（芳賀矢一 1937：734-736）。

#### 3）玉井家の『寄せ書き』より

一方、藤代禎輔のベルリン時代の足跡を伝えるもう一つの記録が、玉井喜作の家を訪問した人々が書き残した『寄せ書き』（泉巖 1986）である。これが本郷台町の独逸学校、東京大学予備門に続く、藤代禎輔と玉井喜作との第3の接点を示す資料となる。この『寄せ書き』の中で藤代禎輔の名前が出てくるのは、次の3箇所である。

##### ・1900年（明治33）11月17日

この日は玉井喜作が日本を出発して8回目の記念日ということで、以下の9人が出席しパーティーを開いている。巖谷小波、水野酔香（水香とも、法学・公使館外交官補）、美濃部達吉、山上兼輔（耳鼻咽喉科・開業医）、藤代禎輔、戸塚機知（細菌学・陸軍軍医）、津軽英麿（法律、政治経済・貴族院議員）、望月惇一（内科学・京都府立医学専門学校教授）、美濃部俊吉（北海道拓殖銀行頭取、朝鮮銀行総裁）。

##### ・1901年（明治34）5月18日

この日は玉井喜作の35歳の誕生日であった。出席者は藤代禎輔、泉谷氏一（関西写真製版印刷合資会社社員）、松村松年（昆虫分類学・北海道帝国大学教授）、盧百寿など10人と、東京の花柳界、烏森の扇芳亭の芸者一行11名であり、日本風の宴会が開かれている。

##### ・1901年（明治34）6月2日

この日も烏森の扇芳亭の芸者一行とともに、以下の8人が出席し宴会を行っている。中西亀太郎（内科学・京都帝国大学医学部教授）、村山恒太郎（医学）、宮本叔、戸塚機知、平井毓太郎（小児科学・京都帝国大学医学部教授）、藤代禎輔、大西克孝（内科学・金沢医学専門学校教授）、松村松年。

この内、5月18日と6月2日に登場する烏森の扇芳亭の芸者一行については、木村毅や宮岡謙二が紹介している(木村毅 1963:173-177、宮岡謙二 1978:87-99)。この芸者一行の中には、後に大逆事件で処刑される奥宮健之(1857-1911)も含まれており、その署名も当日の『寄せ書き』に残されている。彼はその中で通訳兼マネージャーのような役を担当していたようである(絲屋寿雄 1981:120-124)。この芸者一行の動向は、本稿のテーマであるオペレッタ『芸者』に深く関係する部分なので、次回以降に詳しく取りあげていくことにしたい。

なお上記の3箇所に登場する人物の専門と、帰国してから後の職業などに関しては、主に『幕末・明治期海外渡航者人物情報事典』(手塚晃・石塚利男共編 2003)を参照し、水野酔香については遠山嘉雄「ドイツ留学生の絵はがき」(遠山嘉雄 1986)を参照した。

## 2. ライプツィヒ大学時代

### 1) ライプツィヒ大学在籍期間

ベルリン大学で2学期間学んだ藤代は、1901年(明治34)の8月から9月にかけて、約50日間ドイツとスイスを旅行している。ヴァイマル、イエナ、アイゼナッハ(ヴァルトブルク)、チューリッヒ、ルツェルン、シュトラースブルク、ボン、ケルン、ハノーファー、そしてベルリンという長旅であった。この間の旅程については上村直己教授の研究に詳しい(上村直己 2001:231-233)。

藤代は、留学2年目にはミュンヘン大学に在籍するつもりであった。しかし、ベルリン大学のシュミット、E.教授の勧めでライプツィヒ大学にした。ここでの在籍期間は、1901年10月16日から1902年8月1日までの2学期間であった(上村直己 2001:235)。

### 2) 受講登録科目

この大学で彼が受講登録した科目の中に、音楽関係のものが2つあり、興味深い。すなわち1901年から1902年にかけての冬学期における「バッハ, J.S. 生涯と作品」(プリューフエル教授)。そして1902年の夏学期における「18世紀及び19世紀の芸術と世界観との関連におけるリヒャルト・ヴァーグナー:1902年夏のバイロイト舞台祝祭劇、リヒャルト・ヴァーグナーの「さまよえるオランダ人」「ニーベルングの指輪」「パルジファル」の準備のために」(プリューフエル教授)の2つである(上村直己 2001:235-236)。藤代禎輔と音楽との関連については次回の稿で論じる予定なので、これに関してもその時にもう一度取りあげたい。

なお昨年紹介した北里闌は、滞欧4年半(1897-1902)余りの間にドイツ語による戯曲を3編出版している。

『南無阿弥陀仏』(1899, Dr. H. Lüneburg Verlag)、『フミオ』(1900, Verlag von Carl Reissner)、『佐倉宗吾』(1901, Hermann Seemann Nachfol-

ger)の3編で、すべて純粋な科白劇であり、日本を舞台にした作品である。最後の『佐倉宗吾』は、歌舞伎の『佐倉義民伝(東山桜莊子)』に基づいた作品である。これに関してはゴットハルト, A.による批評と、当時ライプツィヒ大学にいた藤代禎輔からこれを贈呈された劇作家ヴィルデンプルッフ, E.v.の感想が、“Ost=Asien”通巻50号に掲載されている(Gotthardt, August 1902, 泉健 2009:14)。

### 3) 瀧廉太郎との関連

#### ①洋行途中の船中での写真

ところで藤代禎輔のライプツィヒ大学時代は、ちょうど瀧廉太郎(1879-1903)のドイツ留学時代と重なっている。ここで少し瀧の足跡を追ってみたい。瀧は1901年(明治34)4月6日に横浜を出港し、1902年(明治35)10月17日に帰国している。

日本で、明治以降の音楽のあり方を研究するために音楽取調掛が設置されたのは、1879年(明治12)であった。瀧廉太郎がドイツに留学した1901年とは、その音楽取調掛で急遽西洋の音楽が学習され始めてから、わずか22年しか経っていない時である。

36頁の年表に、瀧が留学した当時のヨーロッパ・クラシック音楽界の作品をいくつか挙げておいた。19世紀末から20世紀初頭の西欧文化圏では、ラフマニノフ, S., ラヴェル, M., マーラー, G., ドビュッシー, C.などのこのような作品が書かれていたのである。そこに留学したのが、瀧廉太郎であった。彼が生まれたこの極東の国では、その留学の時点で、単純な旋律にドミソ、ファラド、ソシレの和音をつけることを学び始めてから、わずか22年しか経っていなかったのである。

41頁の写真3は、西欧へ行く時の船中で写したものであると思われる。この8人の名前は、『目で見える獨協百年』に記されている。すなわち、前列左から白鳥庸吉(東洋史学・東京帝国大学教授)、大村仁太郎(ドイツ語・学習院教授)、瀧廉太郎、後列左から西園寺八郎(法律、経済・宮内省官僚)、大森英太郎(産婦人科学・開業医)、高橋章臣(植物学・奈良女子高等師範学校教授)、宮崎兼雄、大谷瑩亮(仏教・大谷大学教授)である(獨協学園百年史編纂委員会編 1983:61)。この写真3、及び次の写真4、5に写っている各人物の専門と帰国してから後の職業に関しては、『幕末・明治期海外渡航者人物情報事典』(手塚晃・石塚利男共編 2003)を参照した。

なお『目で見える獨協百年』の説明には、この写真が撮影されたのは1902年(明治35)5月、大村仁太郎のベルリン留学時代とされている。しかしその時には、瀧はすでにライプツィヒで入院していた。従ってこの写真は、洋行途中の瀧の手紙を考慮すると(大分県教育庁文化課編 1994:122-124)、1901年春の洋行時の船中のものであろう。





写真3 ヨーロッパ行きの船中で  
『目で見える獨協百年』p.61より

## ②ベルリンでの20日間

瀧がベルリンに到着したのは、1901年（明治34）5月18日であった。従来瀧の伝記では、彼はベルリン到着の日にはホテル・ベレヴューに1泊し、すぐにノルレンドルフ通り1番地の下宿に移ったと書かれてきた（小長久子 1968：194-197、松本正著・大分県立先哲史料館編 1995：219-221）。確かに5月18日付の鈴木毅一宛の絵葉書の住所はホテル・ベレヴューとなっているし、また5月20日付の杉浦親子宛の絵葉書の住所はノルレンドルフ通り1番地となっている。さらに5月22日付の瀧民子宛の絵葉書の住所も、ノルレンドルフ通りと書かれている（大分県教育庁文化課 1994：131-132, 166-167）。

ところが“Ost=Asien”を調べてみると、ベルリン時代の瀧の住所はノルレンドルフ通り1番地ではなく、ノイエ・ヴィンターフェルト通り56aと記されているのである。“Ost=Asien”には「ドイツにおける日本人」という住所録の頁がある。瀧の名前が登場するのは通巻No.39（1901年6月号）からで、そこには彼の住所のみが、ベルリンの項に「ノイエ・ヴィンターフェルト通り56a」（Japaner in Deutschland 1901a：101）と記されている。瀧はベルリンには20日間しか滞在せず、6月7日には音楽院に入学するためにライプツィヒに着いている。次のNo.40号（1901年7月号）の住所録では、すでにライプツィヒの項に、彼のことが「音楽教師、フェルディナント・ローデ通り7番地」と記されている（Japaner in Deutschland 1901b：150）。

現在のベルリン市内の地図には、ノイエ・ヴィンターフェルト通りという名称は見つからない。「ノイエ」の付かないヴィンターフェルト通りは、ノルレンドルフ通りの一つ南の通りに存在する。いずれも、旧西ベルリンのクーダム通りを象徴するカイザー・ヴィルヘルム記念教会から東南に1.3kmほど行ったあたりである。現在のヴィンターフェルト通りが、もし当時ノイエ・ヴィンターフェルト通りと呼ばれていたとすれば、この「ノイエ・ヴィンターフェルト通り56a」とは、当初

引っ越すつもりで『Ost=Asien』の編集部（玉井喜作）にこの住所を連絡したが、付近に行ってみて気が変わり、一つ北のノルレンドルフ通りに決めた、ということなのだろうか。あるいは、わずか3週間足らずの滞在にもかかわらず、1度下宿を変えたのであろうか。この点は現在不詳である。

## ③1901年7月21日の写真

さて、瀧は1901年（明治34）5月18日から20日間をベルリンで過ごした後、音楽院に入学するために6月7日にライプツィヒに移った。次の写真4は、その翌月の7月21日に、ライプツィヒ在住の邦人とともに写したものである。後列左端が瀧であり、同じく後列左から3人目が昨年紹介した北里闌である。北里は1899年秋から1901年秋までライプツィヒ大学に在籍したので（泉健 2009：13）、これは同大学での最後の学期の時となる。



写真4 1901年7月21日の写真  
『大分県先哲叢書 瀧廉太郎 資料集』p.194より  
（大分市歴史資料館所蔵）

従来この写真を掲載した瀧の伝記・資料集では、この写真に写っている15人の内、瀧以外の人物に関する説明はなかった（属啓成 1961：65、大分県教育庁文化課編 1994：194）。ところが、“Ost=Asien”に連載されている住所録「ドイツにおける日本人」を調べてみるとそれが判明したので、ここに紹介しておきたい。

当時ライプツィヒに住んでいた日本人の数を、“Ost=Asien”のこの欄で調べてみると、通巻No.40号（7月号）には15人、No.41号（8月号）にも15人、そしてNo.42号（9月号）には16人の名前が記されている（Japaner in Deutschland 1901b：150、1901c：198、1901d：246）。既述のように、5月18日にベルリンに到着した瀧の住所は、No.39号（1901年6月号）のベルリンの項に掲載されていた。そして6月7日にライプツィヒに到着した時には、No.40号（1901年7月号）のライプツィヒの項に掲載されている。つまり毎月20日前後の出来事は次の月の号に掲載されていることがわかる。従って、7月21日に写したこの写真に写っている日本人の住所は、No.41号（1901年8月号）に掲載



されていると考えられる。そしてNo.41号のライブツィヒの項には、ちょうど15人の日本人が次の順番に掲載されており、各人の人名・肩書き・住所がアルファベットで記されている (Japaner in Deutschland 1901c: 198)。次の15人であるが、これがこの写真に写っている人々であろう。

服部宇之吉 (漢学・東京帝国大学教授)、金子馬治 (哲学・早稲田大学教授)、河合十太郎 (数学・京都帝国大学教授)、川合貞一 (哲学・心理学・慶應義塾大学教授)、気賀勘重 (経済学・慶應義塾大学教授)、北里闌 (ドイツ語・大阪医科大学予科教授)、栗田直八郎 (軍人・陸軍中将)、Okushima, H.、大幸勇吉 (電気化学・京都帝国大学教授)、瀧廉太郎、谷本富 (教育学・京都帝国大学教授)、渡辺熙 (内科学・開業医)、山口弘一 (国際法・東京商科大学教授)、山口小太郎 (ドイツ語・学習院大学教授)、横手千代之助 (衛生学・東京帝国大学教授)。

なおこの15名の内、ほぼ1年後の瀧の送別会の折の写真 (右の写真5) にも写っているのが、金子馬治、河合十太郎、川合貞一、横手千代之助の4人である。古い写真なので少し判別しにくい、この2枚の写真を比較してみると、写真4の中のこの4人は、おそらく次のようになると思われる。すなわち最後列の右端が川合貞一、同列右から三人目が河合十太郎、中列右から二人目の椅子に座りテーブルに左肘を置いているのが金子馬治、その左隣が横手千代之助であろう。残る9人の同定は、今回は資料が揃わずできなかったが、調査すれば判明するであろう。

#### ④ 藤代禎輔と瀧廉太郎

この写真4を撮影して2ヶ月と10日後の10月1日に、瀧はライブツィヒ王立音楽院を受験し合格した。しかしわずか2ヶ月も通わない内に、11月25日には感冒に罹り、12月2日には聖ヤコブ病院に入院した。翌1902年 (明治35) 7月5日には帰国命令が発せられ、8月24日にアントワープを出港し、10月17日に帰国している (泉健 2005: 41-42)。そして翌1903年 (明治36) 6月25日に、23年と10ヶ月の人生を終えた。

既述のように、藤代禎輔のライブツィヒ大学での在籍期間は、1901年10月16日から1902年8月1日までの2学期間であった。従って、これは瀧がライブツィヒにいた時期とちょうど重なっている。1902年7月6日には、ライブツィヒにいた日本人が瀧の送別会を開いており、藤代も出席している。次の写真5はその時に写したものである。前列左から島崎赤太郎 (音楽・東京音楽学校教授; 瀧の後任として来独)、瀧廉太郎、田丸卓郎 (物理学・東京帝国大学教授)、中列左から金子馬治、谷口吉太郎 (内科学・旭川旭東病院長)、横手千代之助、榎野馨 (医学・開業医)、後列左から塚原正次 (心理学・広島文理科大学教授)、藤代禎輔、藤岡勝二 (言語学・東京帝国大学教授)、小西重直 (教育学・京

都帝国大学教授)、北豊吉 (衛生学・細菌学・文部省官僚)、河合十太郎、川合貞一である (松本正著・大分県立先哲史料館編 1995: 250)。



写真5 送別会 藤代禎輔と一緒に  
『大分県先哲叢書 瀧廉太郎 資料集』p.196より  
(大分市歴史資料館所蔵)

#### 4) ミュンヘン滞在から帰国へ

さて、藤代は1902年 (明治35) 8月1日にライブツィヒ大学を退学して以降、時期は明確ではないが、帰国までの間を「ミュンヘンで演劇と美術の鑑賞に没頭」 (藤代禎輔 1927: 75) していた。19世紀末から20世紀初頭のミュンヘンは、世紀末芸術が花開いたバリ、ウィーン、ミラノなどと呼応しあい、「いっきに中欧の文化的中心」 (宮下健三 1985: 5) となっていた。特にミュンヘン大学近辺のシュヴァービング地区は、1900年前後には「一種の芸術家村」 (山本定裕 1993: 260) となっており、文学、美術、演劇など様々な芸術の花々が咲き乱れていた。

「純粋の詩人たるにはあまりに理智が明哲で、学究的思索家というには余りに豊かな詩情の持主であった」 (近代文学研究室 1967a: 273) 藤代にとって、このようなミュンヘンの環境はまさに理想的なものであったと思われる。短期間ではあったが、彼はここで水を得た魚のように毎日演劇を観に行ったり、美術館で泰西名画の数々を鑑賞したりしたのであろう。藤代はこの時に声楽を習っていたのではないかという指摘もある (上村直己 2001: 248-249)。これに関しては、今回の論攷で藤代と音楽の問題を論じる時にもう一度取りあげていきたい。

帰国に際し、藤代は「11月4日ないし5日」 (上村直己 2001: 249) 頃アントワープを出発し、ロンドンに寄って夏目漱石に会っている。そして横浜港には1902年12月26日に到着した。

### Ⅲ. 帰国後から晩年まで

#### 1. 東京帝国大学講師から京都帝国大学教授へ

さて、帰国後の藤代は第一高等学校教授に復帰し、翌1903年 (明治36) 2月7日付で東京帝国大学文科大学講師となり、ドイツ文学を講義した。「彼の留学はドイツ文学研究を目的とする留学としては最初」 (上村直

己 2001：251）であり、「帰国後の藤代は日本人として初めて大学においてドイツ文学を講義した」（上村直己 2001：250）ことになる。

東京大学は1877年（明治10）に創設され、1886年（明治19）には帝国大学と改称された。さらに1897年（明治30）には東京帝国大学と改称されている。これは同年に京都帝国大学が創設されたためである。その京都帝国大学文科大学では、1907年（明治40）5月に西洋文学講座が設置された。その時に藤代は京都帝国大学文科大学教授となり、そこでドイツ文学を担当することになった。

潮木守一教授は、創設期の京都帝国大学法科大学の教授陣の経歴の特徴として、「彼らの大部分は明治二五年、二六年、二七年の三年間に東大を卒業し……明治二九年から三二年にかけて海外留学に出発し、帰国とともに京大教授となっている」（潮木守一 1997：26）という傾向を指摘している。藤代は1891年（明治24）に東大を卒業し、1900-1902年（明治33-35）に留学しているので、分野と赴任の時期は異なるが、ほぼこの世代に属している。

## 2. 京都帝国大学での講義、講読、演習

京都帝国大学で藤代が行った講義、講読、演習などの内、1910年（明治43）から1926年（大正15）までのものは明らかにされている（近代文学研究室 1967a：282-284）。また京都帝国大学における藤代の業績については、『京都大學文學部五十年史』が詳しく伝えている。それによれば、「藤代教授はドイツ文學（ことに一八、一九世紀）の正しい鳥瞰圖を與えようと努力したが、その研究が推し進められて行くにつれて自然に一つの中心ができ、一つの道が開かれ」（京都大學文學部 1956：224-225）ていった。

そして「藤代教授は主としてドイツ戯曲の研究に力を注いだ。すなわち、レッシング、シラー、ゲーテ、ハインリッヒ・フォン・クライスト、ヘッベル、オット・ルードヴィヒ、グリルパルツァーなどの作品が繰返し講ぜられ、さらに下ってはリヒアルト・ヴァーグナーやゲルハルト・ハウプトマンに及んだ。現在本研究室に備品として保存されているヴァーグナーの珍しいレコードは、当時の蒐集によるものである。ドイツ世話悲劇は藤代教授の重要な研究題目の一つであったが、それと並んで一九世紀の寫實小説、なかでもコンラット・フェルディナント・マイヤーとケラーの作品にも特別の注意が寄せられていた」（京都大學文學部 1956：225）そうである。

## 3. 『吾輩は猫である』と『牡猫ムルの人生観』

帰国してから6年目の1907年（明治40）3月に、藤代禎輔は「おしやます物語」（カーテル・ムル口述、素人筆記）という短編の中に、玉井喜作のことを書いて

いる。これは同年4月に書かれた「舶来猫物語」とともに、彼の最後の著作『鵝筆餘滴』に収録されている（藤代禎輔 1927：163-171、172-191）。これらの2編は、前年の1906年（明治39）5月に書かれた「猫文士気焰録」（藤代禎輔 1914：356-372）とともに、ホフマン、E.T.A.（Ernst Theodor Amadeus Hoffmann 1776-1822）の最晩年の作である『牡猫ムルの人生観』（1820-1822）のスタイルを借りたものである。『牡猫ムルの人生観』の成立やその内容に関しては、吉田六郎氏の研究に詳しい（吉田六郎 1971：450-460）。

学生時代以来の親友である夏目漱石は、『吾輩は猫である』を、『ホトトギス』の1905年（明治38）1月号から1906年（明治39）8月号まで10回にわたって連載した（夏目漱石 1990：551）。従って藤代の「猫文士気焰録」は、まだ漱石の『吾輩は猫である』が連載中に発表されたわけであるが、その中に次のような一節がある。

「此頃日本の文壇で夏目の猫と云うのが、恐ろしく幅を利かせて居ると、今は天國に居る吾輩の耳にも聞こえた……（中略）……但少し氣に喰わぬのは、まだ、世界文學の知識が足らぬ為かも知れぬが、文筆を以て世に立つのは同族中己が元祖だと云わぬばかりの顔附きをして、百年も前に吾輩という大天才が獨逸文壇の相場を狂はした事を、おくびにも出さない。若し知って居るのなら、先輩に對して甚だ禮を缺いて居る譯だ。現に吾輩等は、チークが紹介してロマンチックの大立物となった「長靴を履いた猫」を斯道の先祖と仰いで、著書の中で敬意至れり盡せりだ。」（藤代禎輔 1914：356,360）。

このように、藤代はホフマン、E.T.A.の『牡猫ムルの人生観』（1820-1822）を下敷きにして、ティーク、L（Ludwig Tieck 1773-1853）の『長靴を履いた牡猫』（1797）も引き合いに出しながら、当時世間で有名になっていた『吾輩は猫である』と類似のスタイルを持つ作品が、ドイツではすでに100年前に存在していたことを、たっぷりのユーモアとともに告げているのである。このことに関する詳細な経緯については、深田甫の訳者解説に詳しい（ホフマン、E.T.A. 1972：808-812）。

## 4. 玉井喜作に対する後年の回想

この「猫文士気焰録」の翌年に書かれたのが、「おしやます物語」であった。そして藤代はホフマンのスタイルを借りて、かなりくだけた調子で、この中にオペレッタ『芸者』のこと、能楽のこと、玉井喜作のことなどを語っているのである。オペレッタ『芸者』と能楽に関しては次回以降に考察していく予定なので、ここでは玉井喜作のことが語られている部分を紹介しておきたい。（ ）内は筆者による補遺である。

「イヤこれは話が太分横道へ逸れたが、藝者に就い



て今ひとつ思い出した事がある。今から七年前巴里に世界博覧會があった時、日本から藝者を出品した。其藝者共が博覧會が済んでから歐羅巴（ヨーロッパ）各國を押廻した。多分ウント金を儲けて故郷へ錦を飾る積もりだったのだろう。中々感心な心掛だ。日本は岩戸神樂の昔から女ならではの國と云うがどうも女の方が豪い様だ。前に引合に出したエドキン・アーノルドも日本では男と女と全て別人種だと云てる。其の證據には日本人で川上貞奴程西洋へ名の賣れた人は恐らく外にあるまい。其貞奴も前身は藝者だったので、博覧會藝者も貞奴の向を張らうと云う意氣込みで、露、墺二國を經廻ったが、思わしく行かない。維也納（ウィーン）まで辿り着くと二進も三進も行かなくなった。其時玉屋とか云ふ伯林の名物男（玉井喜作）が一肌脱いで一行を伯林に引取り、然るべき舞臺を借りてカッポレや茄子カボの踊を見せた。これが存外旨く當ってホーヘンローへ老公も孫娘を連れて見物に來られると云う騒、其内オペレッテの藝者の中へ本物の藝者に混って舞臺に現はれることとなり、一行の懷都合もよくなり、無事に帰朝が出來た。

此善根を施した名物男も去年死んだ相だ、四十に為ると大飛躍を試みて玉屋丸と云う汽船を造り、其船で花々しく日本へ乗り込む積だった相だが、其志を果さずに異國の土となったのは可哀相だ。長く逆境に立て居たので、多少片意地な所もあり、向面が強く、鼻息が荒かったから、折々人と衝突して、随分悪口も聞えた様だが、兎に角一種の人物に相違ない。日本を立つ時に家族と水盃をして、馬關（山口県下関）から船に乗る前、汽船費を差引貳拾圓足らずの金があったのを、是ばかりあったって、何の訳にも立たないと、財布の底を引拂たいて飲んで仕舞ひ、文無しで浦鹽（ウラジオストク）へ渡り、とうとう歐羅巴まで伸した様だ。其代り人里にさえ着けば、薪割でも牛殺の手傳でもなんでも為て、兵糧を拵へては先へ先へと進んだ。人間の居る所なら、随分文無しでも渡れるものと見える、所が西伯利亞（シベリア）の事だから何日も人目に逢わないことがある。一度は生胡瓜一本で四日間命を繋いだこともある。こんな艱難辛苦を凌いで目的地に達してからも、給仕とか丁稚とか云ふ端役から、段々と仕上げて、終に歐羅巴の真中で一戸を構へ、妻子を呼迎へる程に為ったのは、大抵の人に眞似の出来る藝ではない。これ程剛情我慢な男の事だから、今少し生かして置いて、思ふ存分の働をさせたら、目覚ましい事を仕出來したらうに、惜い事をした」（藤代禎輔 1927：169-171）。

以上である。ここには、東京の独逸学校、東京大学予備門、そしてベルリンの玉井家と3つの接点を持って玉井を見てきた藤代禎輔の、偽りのない玉井喜作像が描かれていると言えるであろう。

## 5. 晩年まで

藤代は1916年（大正5）3月から3年間、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学の前身）校長と、京都市立美術工芸学校校長も務めており（近代文学研究室 1967a：274）、美術の領域に関しても関心が深かったことがわかる。次の写真6は京都帝国大学時代のものと思われる。彼の最後の著書（遺作）となった『鵝筆餘滴』に掲載されたものである。



写真6 藤代禎輔（素人）  
藤代禎輔『鵝筆餘滴』口絵より

以上のように、藤代禎輔は日本におけるドイツ文学研究者の嚆矢として、重要な役割を果たしてきた。しかし病魔には勝てず、1927年（昭和2）4月18日に直腸癌のため死去した。享年58歳であった。墓は京都七条の智積院裏の小高い丘の中腹にある。

## 終わりに

以上、本稿では藤代禎輔（素人）の生涯を辿ってきた。今回は残された彼の4冊の著作『草露集』『文藝と人生』『文化境と自然境』『鵝筆餘滴』を中心として、その中から彼の音楽観や音楽との関わりなどを考察していきたい。これは、日本における西洋音楽の受容に関して貴重な資料となるであろう。

## 引用文献・参考文献

日本語文献は著者・編者の五十音順に、欧文献は著者・編者のアルファベット順に配列してある。

### 1：日本語文献

新井潤美

2001『階級にとりつかれた人々』（中央公論社）

泉 巖

1986『玉井喜作宅における寄せ書き 自明治33年3月30日—至明治39年3月15日』（覆刻私家版）

泉 健



- 2001「書評：Brenn, Wolfgang. Goerke, Marie-Luise hrsg., Berlin-Tōkyō im 19. und 20. Jahrhundert. Berlin, Springer Verlag, 1997.」『音楽学』46巻 3号, pp.171-173.
- 2002「『Ost=Asien』研究～その1.全目次」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集,pp.107-204.
- 2003「『Ost=Asien』研究～その2.人名注解；外国人編」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集,pp.33-71.
- 2004a「『Ost=Asien』研究～その3.人名注解；日本人編」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集,43-79.
- 2004b「『Ost=Asien』研究～その4.全目次；独語版」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第54集,81-179.
- 2005「ベルリンの玉井喜作」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第55集,pp.27-50.
- 2006「文献に見る玉井喜作一没後100年を記念して」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第56集,25-47.
- 2007「光市文化センターと玉井喜作」『和歌山大学 教育学部紀要 人文科学』第57集,pp.23-37.
- 2008「“Ost=Asien”における森鷗外『舞姫』（宇佐美濃守独訳）」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第58集,pp.27-50.
- 2009「北里関「日本の演劇」ベルリン,1901」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第59集,pp11-26.
- 絲屋寿雄  
1981『自由民権の先駆者』（大月書店）
- 井野瀬久美恵  
1990『大英帝国はミュージック・ホールから』（朝日新聞社）
- 猪瀬直樹  
2002『猪瀬直樹著作集5 ミカドの肖像』（小学館、初版1986）
- 岩田隆  
2005『ロマン派音楽の多彩な世界』（朱鳥社）
- 潮木守一  
1997『京都帝国大学の挑戦』（講談社）
- 海老沢敏  
2004『瀧廉太郎』（岩波書店）
- 大島幹雄  
1998『シベリア漂流—玉井喜作の生涯—』（新潮社）
- 大分県教育庁文化課編  
1994『大分県先哲叢書 瀧廉太郎 資料集』（大分県教育委員会）
- 上村直己  
1988「東京・本郷台町の独逸学校について」『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第23号,pp.153-166.
- 2001「ドイツ留学時代の藤代禎助」『明治期ドイツ語学者の研究』（多賀出版）pp.221-258.
- 2008『近代日本のドイツ語学者』（鳥影社）
- 木村毅  
1963『海外に活躍した明治の女性』（至文堂）
- ギルバート, W.S.  
2002『喜歌劇 ミカド』小谷野敦訳（中央公論新社）
- 京都大学文学部  
1956『京都大学文学部五十年史』
- 近代文学研究室  
1967a「藤代素人」『近代文学研究叢書26』昭和女子大学, pp.267-311.
- 1967b「芳賀矢一」『近代文学研究叢書26』昭和女子大学, pp.79-142.
- 倉田喜弘  
1983『1885年ロンドン日本人村』（朝日新聞社）
- 小長久子  
1963『楽聖滝廉太郎の新資料』（大分滝廉太郎研究会）
- 1968『滝廉太郎』（吉川弘文館）
- 属啓成  
1961『滝廉太郎 音楽写真文庫Ⅵ』（音楽之友社）
- 庄野潤三  
1986『サヴォイ・オペラ』（河出書房新社）
- 第一高等学校編  
1939『第一高等学校六十年史』（第一高等学校）
- 田口卯吉編  
1974『大日本人名辞書』全5巻（講談社、初版1886、11版1936の復刻）
- 玉井喜作  
1888「履歴書」（6月に札幌農学校に提出）
- 鶴岡紫磯子  
1982「近代フランス音楽にあらわれたオリエントと日本」『ジャポネズリー研究学会会報』第2号,pp.8-28.
- 1984「歌劇『お菊さん』をめぐって—ジャポニズムと劇場音楽—」『ジャポネズリー研究学会会報』第5号,pp.28-39.
- 2008「ジャポニズム・オペラ「ザ・芸者」公演批評」『ジャポニズム研究』28,pp.78-81.
- 手塚晃・石塚利男共編  
2003『幕末・明治期海外渡航者人物情報事典』（雄松堂出版 CD-ROM）
- 寺崎昌男  
2007『東京大学の歴史—大学制度の先駆け—』（講談社）
- 東京室内歌劇場編  
2007『東京室内歌劇場39期117回定期公演プログラム《ザ・芸者》』（東京室内歌劇場）
- 東京大学百年史編集委員会  
1984『東京大学百年史 通史（一）』（東京大学）
- 遠山嘉雄  
「ドイツ留学生の絵はがき」『向陵』1986年10月号（旧制第一高等学校同窓会誌）pp.56-68.
- 獨協学園百年史編纂委員会編  
1983『目で見える獨協百年』（獨協学園）
- 獨協学園百年史編纂室編  
1980『獨協百年』第4号（獨協学園百年史編纂委員会）
- 富田仁編  
2005『新訂増補 海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ）
- 中山茂  
1978『帝国大学の誕生』（中央公論社）
- 芳賀矢一  
1937「留學日誌（明治33～35年）」芳賀檀編『芳賀矢一文集』（富山房）pp.610-737.
- 夏目漱石  
1990『吾輩は猫である』（岩波書店）岩波文庫改版
- 橋本順光  
2003「茶屋の天使—英国世紀末のオペレッタ『ゲイシャ』（1896）とその歴史的文脈—」『ジャポニズム研究』第23号, pp.30-50.
- 藤代禎輔（素人）  
1906『草露集』（大倉書店）
- 1910「獨逸語と余が半生」『獨逸語学雑誌』5月号, pp.421-422.
- 1914『文藝と人生』（不老閣書房）
- 1922『文化境と自然境』（文献書院）
- 1927『鵝筆餘滴』（弘文堂書店）
- ホフマン, E.T.A.

1972『牡猫ムルの人生観』深田甫訳(創土社)『ホフマン全集』  
第七巻、原著は1820-1822

松尾展成

2005『日本＝ザクセン文化交流史研究』(大学教育出版)

松本正著・大分県立先哲史料館編

1995『瀧廉太郎』(大分県教育委員会)

馬淵明子他編

2000『ジャポニスム入門』(思文閣出版)

宮岡謙二

1978『異国遍路旅芸人始末書』(中央公論社)

宮下健三

1985『ミュンヘンの世紀末』(中央公論社)

宮瀬睦夫

1996『瀧廉太郎伝』(大空社、初版は1955年関書院)

山本定裕

1993『世紀末ミュンヘン』(朝日新聞社)

湯郷将和

1989『キサク・タマイの冒険』(新人物往来社)

吉田六郎

1971『ホフマン—浪漫派の芸術家—』(頸草書房)

渡辺實

1978『近代日本海外留学生史 上・下』(講談社)

## 2：欧文学文献

Japaner in Deutschland

1901a “Berlin” Ost=Asien, No.39, IV-3, pp.100-102.

Japaner in Deutschland

1901b “Leipzig” Ost=Asien, No.40, IV-4, pp.148-150.

Japaner in Deutschland

1901c “Leipzig” Ost=Asien, No.41, IV-5, pp.196-198.

Japaner in Deutschland

1901d “Leipzig” Ost=Asien, No.42, IV-6, pp.244-246.

Takeshi KITASATO

1901 “Das japanische Theater.” Ost=Asien, No.45, IV-9, pp.406-408.

Teisuke FUJISHIRO

1901 “Die Operette : Die Geisha” Ost=Asien, No.41, IV-5, pp.211-213.

Gotthardt, August

1902 “Gedanken über Sakura Sogo.” Ost=Asien, No.50, IV-2, pp.82-83.

## 3：映像資料、Web資料

映画『Topsy-Turvy』(トプシー・タービー)

NHK BS2放送 2004年2月4日

VHSテープ『喜歌劇 ミカド』

東映株式会社VFZT 00912

CD『Sidney Jones, The Geisha』

Hyperion CDH55245 (1998年6月19-21日の録音)

大須オペラ『芸者』(2009年8月15日アクセス)

<http://www.nakash.jp/opera/review00/26geisya.htm>